

近代の行方と人文知の意義

——「物理」と「心理」の間——

「これからは日本もだんだん発展するでしょう」

「亡びるね」

(夏目漱石『三四郎』)

小路口 聡

0.はじめに——「皮相上滑りの開化」

根っからの哲学者広田先生¹の予言にもかかわらず、日本は、幸か不幸か、〈イノベーション〉という名の現代版「皮相上滑りの開化」²によって、その滅亡の時を、先送りしながら、かろうじて存続し続けてきた。そう、今や、〈イノベーション〉、すなわち、「技術革新」こそが、日本を滅亡から救う、起死回生の策なのだ。

吉川洋（マクロ経済学）は、近著『人口と日本経済——長寿、イノベーション、経済成長——』（中公新書、2016）のなかで、日本は、このまま人口が減少し、労働人口が減り続けて行く中においても、生き延びるためには、依然として「経済成長」が必要であるとした上で、今後、「先進国の経済成長を牽引するのは、プロダクト・イノベーションである」（p.182）と主張する。

たとえ21世紀には、先進国で20世紀に生じたような平均寿命の延長がもはや見られないことになるとしても、すでに現実になりつつある超高齢社会において人々が「人間らしく」生きていくためには、今なお膨大なプロダクト・イノベーションを必要としている。……超高齢社会においては、医療・介護は言うまでもなく、住宅、交通、流通、さらに1本の筆記用具から都市まで、すべて変わらざるをえないからである。それは、好むと好まざるとにかかわらず、**経済成長を通してのみ実現されるものである。逆に、先進国の経済成長を生み出す源泉は、そうしたイノベーションである。**（同上、p.185）

われわれもまた、こうした意見に対して、やはり漱石がかつて、「現代日本の開化」という有名な講演の中で語ったように、「併しそれが悪いからお止しなさいと云うのではない。事実已むを得ない、涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならない」（『漱石文明論集』、p.34）と云わざるを得ないのだろうか。

1.歴史は繰り返す

明治維新以降の近代化の延長線上にある、今日の社会が抱えている課題——夏目漱石の所謂「開化のパラドクス」、もしくは、「幸福のパラドクス」（後述）——を、その原点ともいふべき、幕末から明治維新を経て明治の激動期を生き抜いた西周（1829-1897。文政12年～明治30年）が直面していた課題と重ね合わせてみることによって、近代化の問題点と、その行方、そして、今、危機に瀕しているとも言われる、「人文知」の意義について、思いを寄せてみたい。

西周は、東洋の伝統的儒学と西洋の近代科学との出会いと葛藤を、その最先端において、身を以て生きながら、日本に新たに西洋近代の体系化された知の総体としての「学術」を導入しようとした。彼は、江戸から明治への移行期に、自らの私塾において、『百一新論』（慶応3年・1867）と『百學連環』（明治3年・1870）という二つの講義を行っている。そこで、彼が直面していた課題とは、一言で言い表すならば、「〈物理〉と〈心理〉の分離と統一」という難題であった。では、それは、一体いかなる課題であったのか？

2. 『百一新論』と「哲学」の意義

まず、西は、『百一新論』において、「諸教」（「人タル道ヲ教フル」神道・仏教・儒教などの「教」を言う）に含まれる種々の「道理」をきちんと区別して、それらの関係を理解し、それらの目的における「一致」を目指すとして述べた上で、「百教」の教える「人ノ人タル道」を示す「道理」にも、「物理」と「心理」を区別せねばならない、とする。

西に拠れば、「物理」とは、「天然自然ノ理」「アプリオリと云って先天ノ理」であり、「人間の意のままにならない」もの、また、「心理」とは、「人間上バカリニ行ナワレル理」、「アポステオリと云って後天ノ理」であり、「人間の意志によって見出される」ものであった。そして、両者を混同して「心力」で「天然物理上の力」を変化させようように考えるのは誤りであるとして、その代表として、「儒学」が批判の俎上に挙げられる。そうした「惑溺」「迷妄」から解放され、自然現象の実証的理解こそが、「教」に関わる「道理」の理解に大きな意義を持つと云うのである。

そして、西に拠れば、フィロソフィ（哲学）こそが、「物理」的考察の成果を「心理」に照らし合わせて「百教一致」の方法となりうる学であった。更に言えば、西にとって「哲学」とは、いわば「儒学」と「洋学」という形で分立していた知的伝統を統合しうる知的営為であった³。

3. 『百一新論』における西の「儒学」批判

さて、『百一新論』における「儒学」観をおさらいしておこう⁴。

平常唯理があることとのみを心得て其区別をも知らず、物理と心理とを混同して、果々は人間の心力で天然の物理上の力をも変化せられる様に心得るは大なる誤ではござるまいか。⁵

例えば、おそらくは、西周も幼少の頃から慣れ親しんできた、『中庸章句』に、「中和を致せば、天地位し、萬物育す」などという思想が念頭に置かれているのだろう。更には、西周は、陽明学を仇敵のごとく批判していたが、王陽明の「良知」とは、まさに「天を生み、地を生み、鬼神を生み、万物を生み出す」根源的実在⁶であり、王陽明の功夫は、端的に、人心固有の「良知」を「致す（發揮する）」、この一大事に尽きる。

次の言葉は、まさに、その陸王学（南宋の陸象山と明の王陽明の学）にターゲットを絞った儒学批判である。

……程朱などの学は、『大学』の始めに平天下と云ふ語を出したとは違つて、一箇の教門と称し

てよいでござる、中々夫で天下が治まる事は思ひも寄らぬことござるが、仕方を少し替へたならば人々を説諭する手立にもなるでござらう、夫より陸象山から血筋を引いた陽明に至つては、程朱にも輪を掛けた全然たる教門でござって、其知行合一とか良知良能とか、専ら心を師とするの説がまあどうして治国平天下の用になるでござらうか。（『全集』巻一卷、p.275）

「教門」、すなわち、「人心を治める」道德と、「治国平天下」の政治とを混同し、万人が、自己の「良知」や「本心」を発揮しさえすれば、自ずと天下は平らかになるとする、陸王心学の「惑溺」「迷妄」を批判する。

4. 『百學連環』における「學術」観と「儒学」批判

次に、『百學連環』（明治3年・1870）における「學術」観と「儒学」批判について見ていきたい。ここに所謂「學術」とは、「學」と「術」の二つに分かれ、それぞれ英語で science and art である。

西によれば、「學」とは、「何事にもあれ、其源由よりして其眞理を知る」ことだとし、儒教の經典である四書の一つ『大学』に所謂「格物致知」が、それに当たるとし、「物に就て既に其何物たることを充分に知り得る」ことだとする。西が、「物に就いて……」と言う場合、コント流の実証主義を念頭に置いていたようだ。ここで、西は『大学』の「格物致知」を例に挙げているが、朱子学における「格物」の「物」は、必ずしも主観をできるだけ排除した上に成立する客観的存在者の謂いではなかった⁷。

一方、「術」については、「實事上に於て其理を究め、如何にしてか容易く仕遂くへき方便」（『全集』巻四巻、pp.43-4）であるとする。すなわち、「実理」を運用するための手段である。

また、

凡そ學たるものは唯々道理を書物上にて知るのミにては更に益なきが故に、皆實際に入るを要せざるへからず。その實驗に二ツあり。（同上、p.52）

と述べていることから、西が、「學術」は、あくまで、「実験」を基礎とし、「実際に入る」こと、すなわち、実証的であるべきだと考えていたことが分かる。

西は、こうした実証主義の観点から、「儒学」を、次のように批判している。

- ・儒者たる唯徒らに書籍上の論にして、更に眞理に就くもの鮮しとす。
- ・實知なることなくして唯書籍手寄りの學にして、……却て是れ奴隸となり役使せらるるなり。
- ・……後チ陽明の如き人ありて、學は實知にあると論説せり、即ち其説に主心とて學は心を主とするにありといへり。
- ・又云ク、良知良能と、此の如く學は心を主として實知にありと雖も、其知たる五官より發する所の知にあらずして、唯己レか善シと知る所を以て推し及ほすか故に、其弊害ある又大なりとす。

・我が大鹽平八郎の如きは即ち其餘派なり。(以上、同上、p.55)

こうして西の儒教批判の中身については、以下で、さらに詳述する。

5. 「演繹」と「歸納」

西は、「学」の方法として、「演繹」と「歸納」の二つがあるとした上で、古来、学と言え、それは「皆演繹の學」であったとする。所謂「演繹」とは、「唯ターツの據ありて、それより萬事を仕出す」ものであるとし、その欠点は、「終に其郭を脱して卓然たること能は」ざれば、「大概固陋頑愚に陥る」にあるとする。(以上、同上、p.55)

「古昔は西洋も皆演繹の學」であったが、「近來は總て歸納の法と一定せり」(同上、p.56)とした上で、「歸納」法とは、「此眞理を求むるか爲めに物に就て講究し、師に就て見聞し心に信して、動すへからざる、是其眞理にして是を講究見聞すること」(同上、p.58)だとする。また、「其一つの眞理を知るときは事に就て行ふ最も容易なりとす。」(同上、p.58)や、「學者専ら講究し物に就て其理ヲ極めざるへからず。」(同上、p.59)と言った、一連の言い振りの上に、「歸納」こそが、実証的な学にふさわしいものであるという西の學術観が窺える。

こうした「學術」観は、やはり、「儒学」を批判するためのものであった。

6. 再び、西の儒学批判——「演繹の學」の弊害

西に拠れば、儒学は、「一つの重要な拠り所があって、なんでもかんでもそこから引っ張り出す」ものであり、「だから、結局、その囲いから飛び出すことが出来ず、見識が狭く、頑迷なために、道理に暗いという欠点に陥る」(既出。現代語訳。『全集』第四卷、p.55)という批判である。万事万象の根源としての「太極」の理、あるいは、形而上なる「天理」を説く朱子学や、「良知」こそ天地、万物を生み出す根源的実在であるとみなす陽明学は、まさに西にとっては、「演繹の學」の典型であった。

更に、西は、朱子学を、「書籍手寄りの学(書籍だけを手がかりとする学)」であり、それはもはや「書籍の奴隷」にすぎないとまで言う。また、陽明学については、「心を主(師)とし、「ただ自分だけが善いと思ひ込んでいることを基準に、物事を推しはかっているだけ」の、独善的な学と批判している。一方で、「(陸象山・王陽明は)独知より入るもの」であれば、朱子のごときものよりも、「実地の學問」であるとして、評価している(同上、p.182)。ここに所謂「独知」とは「自意識」の謂い⁸で、「書籍」の「奴隷」と批判された朱子学に対して言われたもので、その主体性・自主性・能動性を、相対的に評価したものであろう。

7. 「惑溺」と「臆断」

西は、また「真理の認識を妨げる二つの病」として、「惑溺」と「臆断」の二つを挙げる。ここに「臆断 (prejudice)」とは、「自分流儀に事を決する」ことで、言わば、先入観・偏見の類を謂う。一方、「惑溺 (superstition)」とは、「徒らに事を信する」ことで、言わば、迷信・盲信の類を謂う。

そして、「其二ツの生ずる所以は真理を得ざるにあるなり」とし、「學の最も忌む所」（同上、p.61）であると言う。後に見るように、この真理に至る上での二つの病もまた、儒学批判の重要な鍵語となる。

8.negative knowledge と positive knowledge

更に、西は、knowledge には、negative なるものと positive なるものの二つがあり、「negative knowle(d)ge なるものは、positive なるものと相關係して此真理を知るときは他の真理にあらざるを知り、善を知るときは又他の悪を知るか如く、表裏互二相係り合ふものにして其裏を知るを言ふなり」（同上、pp.61-2）と言う。そして、「譬へは釋氏の虚誕なるを知るときは、孔門の實理なるを知るか如く、其虚たるを一寸知るときは、又其實を一寸知るか如くにして、其力能く並ひ係りてゆくものなり」（同上）と言う。

ここで西は、「釋氏の虚誕」と「孔門の實理」を例に、両者の違いを解説している。これは、まさしく朱子学がよく行う、儒教の側に立った仏教批判の言説を踏まえたものであり、当時の知識人たちには、こうした仏教批判の知識は、きわめて馴染みのあるものであったと思われる。

われわれは、この論理を使って、以上の見てきた西の「學術」観を整理しておこう。

西は、つまり、これまで繰り返し展開してきた儒学批判は、「儒学の虚誕」なるを知ること（negative knowledge）」で、「洋学の實理」なることを理解（positive knowledge）することを目指したものであった。さらに言えば、従来、主流であった儒学を「虚誕」として断罪することで、洋学の實理へ、「學術」をシフトしていこうとしたのである。

その「虚誕」性を断罪する時の鍵語（決めつける言葉）が、先に挙げた「臆断」と「惑溺」である。この二つの言葉を使用して、西周は「儒学」の「虚誕」性を暴こうとしたのである。⁹それを整理したものが、次の表である。

儒学の「虚誕」	洋学の「實理」
「物理」と「心理」の混同	「物理」と「心理」を区別
「主心」・「師心」	「物に就て講究す」「実事に就いて学ぶ」 「物に就て其理を極める」
良知良能は、……唯己しか善シと知る所を以て推し及ぼす（臆断）	「実知」
「儒者たる唯徒らに書籍上の論にして、更に眞理に就くもの鮮な」「書籍の奴隷」	「実験」

すなわち、西は、「心力で天然の物理上の力をも変化せられる様に心得るは大なる誤り」だと、儒学の「惑溺」を指摘し、「実理」をあきらかにすることの重要性を説いた。また、儒学の「主心」・「師心」という「惑溺」を指摘し、「物に就て講究す」「実事に就いて学ぶ」「物に就て其理を極める」という実証的な研究、すなわち、「実験」の必要性を説いた。「実験」を通して明らかにされるのが、「實理」である。また、儒学（主に陽明心学）が重視する根本実在としての「良知良能」は、「唯己しか善シと知る所を以て推し及ぼす」もの、すなわち、「臆断」に過ぎず、それは「実知」ではない

とする。また、儒学（朱子学）は、「儒者たる唯徒らに書籍上の論」であり、「真理に就くもの鮮なし」と、その「惑溺」を批判し、「実験」の必要性を強調した。

9. 「学術」の効用

このように、西は、儒学の「虚誕」性を指弾する一方で、真に「学術」、すなわち、「真理を知る」ことの効用を説く際には、儒学の経典中の言葉を使用せざるを得なかった。「学術」の効用とは、「開物成務」（『易経』繫辞上傳）、「厚生利用」（『書経』大禹謨）、「飽食暖衣逸居」（『孟子』滕文公上）、「養生喪死而無憾」（『孟子』梁惠王上）、「黎民於變時雍」（『書経』堯典）であるとする。すなわち、物心両面の生活の向上、すなわち、「豊か」な社会の実現である。

また、『孟子』滕文公上の、「居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道」を引き、「其大道即ち真理なるなり」（『全集』第四巻、p.59）と言う。そして、「学術」の目的は、孟子が「富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫」と説いた「大丈夫」になることであると、かつての儒教徒西周の一面を露呈させる。

10. 「学術」進化の3段階説

西は、「学術」の進化の過程を、オーギュスト・コントの「3段階」説を使って、次のように説明する。

- ①神学段階（theological stage）：神になぞらえる
- ②空理段階（metaphysical stage）：真偽の確認のできない理屈
- ③実理段階（positive stage）：術に施して使いこなせる真理

西は、すなわち、様々な「惑溺」や「臆断」から解放されて、「実験」を通して得られた「真理」を獲得することこそが、真の「学術」であり、その場合、「真理」とは、要するに、「技術」として利用・適用することのできる「實理」であるということである（同上、p.62）。儒学の「真理」は、依然として「真偽の確認できない理屈」に「惑溺」しているだけの「臆断」にすぎないと言うのである。

例えば、「雷」を例に述べるなら、まず「神鳴（神の鳴るもの）」、「なるかみ」として認知・説明されていたのが①の「神学段階」であり、次に、それは、「陰陽の戦ひ」（周公の易理）などといった「真偽の確認のできない」ような理屈で説かれるようになる。すなわち、儒学・朱子学の学説である。これが②の「空理段階」である。その後、③の「実理段階」に至ってはじめて、「電気（electrical）」として説かれるようになる。「電気」であることの発見は、同時に、「何時にもあれ望みに従ひ雷を發するに至れり」、すなわち、「其眞理を得、而して是を術に施して使ひこなす」ことができるようになったということである（同上、pp.62-3）。つまり、それを操作して実用に供することのできる「実理」こそが、真に「真理」と呼ぶに相応しいものなのである。

11. 狐狸の虚誕——漢儒朱子の惑溺

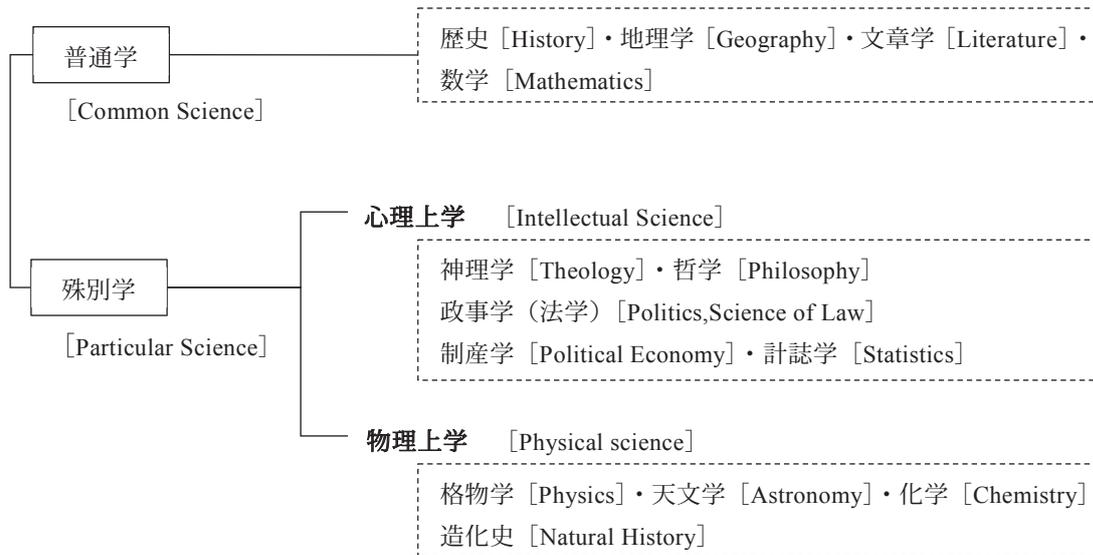
西は、『百学連環』総論「むすび」部分において、漢儒朱子の弊は、「惑溺」を免れないとして、次のように述べている。

此の心理及び物理の二ツを明かに了解し得る者は、古來佛家社家などの説く所の神力、或は祈禱力、或は狐狸の虚誕なるものは、總て其理の據る所なきを知るへし。此の説の如きは歐羅巴中絶へて之なき所なり、然るに漢儒朱子の如きも終に其惑を免かるること能はざるものなり。
(同上、p.69)

ここに来て、儒教は、「狐狸の虚誕」と同列に貶められ、「惑溺」の説として排斥されるまでに至った。

12. 『百學連環』における「學術」の体系

西周の『百學連環』の目的は、「學術」の体系性を描出することにあつた。その際、分類区分をする上で採用されたのが、「心理」と「物理」の区分であつた。



西は、上のように、まず學術を普通學 [Common Science] と殊別學 [Common Science] の二つに分けた上で、そのうちの殊別學を更に「心理學 [Intellectual Science]」と「物理學 [Physical science]」に分ける。これは、現在の大学のカリキュラムにおける「人文科学」と「自然科学」の分類に当たる。むしろ、その創始者が西であつた。

13. 「物理の開化」としての近代

その上で、「心理と物理とは互に相關渉するものにして敢て分明に辨別なしかたきものとす」とした上で、西洋近代においては、「物理の心理に打勝ち得ること甚た大なるに及」んでいる点を指摘し、

更には、「物理が大いに開け」た結果、「materiasm（物理家）の説に学は物理にあり」という風潮すら生まれて来ているという。西の目に映った「近代」とは、まさに「物理の開化」であった。そうした趨勢に対して、西は、「甚だ沈溺せり所の語」であれば、必ずしも従う必要はなく、むしろ、「若し心理の學なきときは禮義の道も自から廢するに至るへし」と、「心理の學」の必要不可欠性と、「心理」による「物理」の管理を強調する。（以上、同上、p.68）

そして、西は、「物理の開化の効用、心理もまたますます明かとなる」と述べ、その例として、物理の開化の結果、蒸気船や蒸気車（機関車）が発明されたことで、数百里を隔てて住む父親が、以前だったら数十日を要して帰省していたものが、たった数日で帰省できるようになったことを挙げている。この利便化、効率化の効果は、何よりも時間短縮として目に見えて明らかになったと見る（同上、pp.68-9）。

14. 「物理は心理に使役せらるるものなり」

西は、『百學連環』総論の結びにおいて、「心理は物理に従ふて變易せざるへからざるものなるが故に、物理は心理よりも學の主として重むすへきものの様に覺へるなり」と言いつつも、同時に、「然れども物理を使役するものは心理にして、物理は心理に役使せらるるものなり」（同上、p.69）と、「心理（上學）」の優越性と、「心理」による「物理」の「使役」を説いていた。

これは、西が、利便性・効率性を指標とする「豊かな社会」の実現にあたって、「物理」の開化が有効であることを認めつつも、同時に、その危険性・弊害を鋭く見抜いていたことを意味する。

ここで注目すべきは、西が、「心理上學」（人文学・文系の知：哲学）は、「物理上學」（自然科学・理系の知：科学技術）を管理するものとして、人文知を重視していた点である。そして、西は、「哲学」の役割を、そこ——すなわち、「物理」（科学技術）を管理をすること——に認めていた。

こうした認識・理解は、きわめて重要である。なぜなら、理系の知の独走は、ともすれば人類を滅亡に陥れる危険性を孕んでいるからである。それを、より切実なる問題にしたのが、原子爆弾の製造とその実用化である。先の大戦で、それが実際に使用されることによってもたらされた甚大な被害は、人類の滅亡（自滅）を、きわめて現実的なものとした。現在、地球上には、2万発の核兵器があり、その破壊力は、地球20個分に匹敵すると言われている。そして、東日本大震災における原発事故は、総理大臣の“under control”という虚偽の発言とは裏腹に、人類がまだ原子力という、ともすれば地球をも破壊に導きかねない、無尽蔵のエネルギーに対して、それが、現在の科学技術力を以てしても、依然としてまだ制御不能であることを知らしめることとなった。

15. 夏目漱石の「開化」論、あるいは、「開化のパラドックス」

冒頭で、まさに「文明開化」の象徴にして、近代化が目指した「効率性」「利便性」の権化ともいふべき「列車」の中で、広田先生を介して、日本の滅亡を予言した夏目漱石¹⁰は、明治44年（1911）、和歌山で行った「現代日本の開化」という有名な講演の中で、「西洋の開化（即ち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である」とした上で、「現代日本の開化は皮相上滑りの開化である」と喝破した¹¹。その上で、漱石は、「開化のパラドックス」説を主張する。

漱石に拠れば、「開化」とは「人間活力の発現の経路」であるが、そうした活動の種類には二種類

あり、一つは「積極的のもの」と「消極的のもの」、前者が「活力節約の行動」で、後者が「活力消耗の趣向」であり、この両者の「入り乱れたる経路」として「開化」というものが出来るとする。

例えば、面倒を避けたい横着心の発達した便法として、人力車、自転車、電車、自動車、さらには飛行器といった多くの文明の利器を生み出したが、その反対に、上記の活力制約のための利器があるにしても、「今日は向こうまで歩いていきたい」という「道楽心」「物好き」の発現として行う「散歩」などが、「活力消耗の部類に属する、積極的な生命の取扱方の一部分」である。すなわち、

二つの入り乱れたる経路、即ち出来るだけ労力を節約したいという願望から出て来る種々の発明とか器械力とかいう方面と、出来るだけ気儘に勢力を費やしたいという娯楽の方面、これが経となり緯となり千変万化錯綜して現今のように混乱した開化という不思議な現象が出来るのであります。（『漱石文明論集』、p.21）

ところが、かかる開化は、「一種妙なパラドックス」を生み出す、と漱石は言う。所謂「開化のパラドックス」である。

この二種類の活力が上代から今に至る長い時間に工夫し得た結果として昔よりも生活が楽になっていなければならないはずであります。けれども実際はどうか？打ち明けて申せば御互の生活は甚だ苦しい。……否開化が進めば進むほど競争が益劇しくなって生活はいよいよ困難になるような気がする。（同上 p.22）

16. 「開化」の病理としての「神経衰弱」

さらに、漱石は、同時に、こうした日本の「皮相上滑りな開化」は、「必然の結果」として人々を「神経衰弱」に罹らせると言う。

体力脳力共にわれわれよりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費やしたものを、如何に先駆の困難を勘定に入れなかった所で僅かその半ばに足らぬ歳月で明々地に通過しおわるとしたならば吾人はこの驚くべき知識の収穫を誇り得ると同時に、一敗また起つ能わざるの神経衰弱に罹って、氣息奄々として今や路傍に呻吟しつつあるのは必然の結果として正に起こるべき現象でありましょう。（同上、p.35）

これは、国家から近代化の先導役を課された帝国大学教授として漱石自らの経験を語ったものに他ならなかった。

17. 幸福のパラドックス……物理と心理の乖離

また、漱石は、「現代日本の開化」の中で、

既に開化というものが如何に進歩しても、案外その開化の賜としてわれわれの受くる安心の度

は微弱なもので、競争その他からいらいらしなければならぬ心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変りはなさそうである。(同上、p.36)

と言うように、現代の先進国に共通する課題としての「幸福のパラドクス」*¹²という現象と、その理由についても、すでに指摘していた。

18.われわれはどこに向かって進もうとしているのだろうか？

西周（1829-1897）と夏目漱石（1867-1916）。明治を代表する、この二人の偉人が直面していた課題——すなわち、「物理と心理の統合」であり、そして、両者の「乖離」がもたらす「幸福のパラドクス」という課題——は、明治維新以降、一貫して変わることなく、近代化を推し進めてきた日本だが、その間、何度も、脱近代、ポストモダンが語られてきたにもかかわらず、今日に至っても、なお尾を引き続けている、極めて現代的課題であると言えるのではなかろうか。それは、すなわち、われわれがまだ真に近代を越えることができていることを、近代の負の遺産を解決することができることを意味する。

それにつけても、文明開化の推進者 西周自身は、きわめてバランスの取れた人であったと思われる。「物理」の開化に偏向してしまっている、当時の西欧の近代化の風潮をするどく看破し、「若し心理の學なきときは禮義の道も自から廢するに至るへし」（『全集』4巻、p.68）と述べ、「物理は心理に使役されるべきである」——理系の知は文系の知によって管理されるべきである——と強く主張していた。西の中に深く根付いていた「禮義の道」を尊ぶ精神が、「物理の開化」にのみ、ひたすら邁進して已まない西欧列国の功利主義的な近代化に対するブレーキとなりえたのではなかろうか。西の中に儒教が尊重して已まなかった「義利の弁」（反功利主義）の思想が、なお息づいているのを見て取ることが出来る。

2015年6月、「文科省が大学の文系学部を廃止しようとしている」というニュースが日本中を駆け巡ったことは、まだ記憶に新しい。その後、室井尚『文系学部解体』（角川新書、2015.12.10 発行）、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（講談社新書、2016.2.22.発行）といったタイトルの書籍が数多く出版され、文系学部の「効用」、その復権について議論がなされてきた。西周が『百学連環』の講義を行った年から145年、漱石が「現代日本の開化」の講演を行った年から104年の今日。ふたたび「物理」（科学技術）の「開化」に邁進し、猫も杓子も〈イノベーション〉という「術」に奔走し、その返す刀で、「心理」の知（人文知）の非効率性を説いて、それを抑制しようとするわれわれの社会は、いったい、どこに向かって進もうとしているのだろうか。

*本稿は、2016年11月19日、東洋大学哲学研究センター主催の研究会「江戸期から明治期の日本における自然観の変遷について——儒学と西洋思想の葛藤——」において、「西周の「學術」観——「物理」と「心理」の間——」という題目で発表したものを大幅に改稿したものである。

註

- 1 「しかし先生は哲学者だね」／「……あの人間が、おのずから哲学にできあがっているからおもしろい」(『三四郎』旺文社文庫、1986、p.86)
- 2 夏目漱石「現代日本の開化」『漱石文明論集』岩波文庫、2015、p.34
- 3 以上は、相楽勉「初期日本哲学における「自然」の問題」(『エコ・フィロソフィ研究』(9), 37-49, 2015-03) に拠る。
- 4 西周の「儒学」批判については、すでに拙稿「西周と陽明学——「生性割記」における「当下便是」説批判をめぐる——」(東洋大学国際哲学研究センター 第一ユニット『近代化と伝統の間——明治期の人間観と世界観——』教育評論社、2016年2月、pp.24-52)において、主に晩年の『生性割記』を取り上げて論じたので参照。
- 5 大久保利謙編『西周全集』第一巻、宗高書房、昭和三五年、p.287。以下、『全集』と略記。なお、原文は、旧字・漢字カタカナ表記。
- 6 その意味については、拙稿「天地を生み出す良知について」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』19号、2013.3.)を参照。
- 7 「格物」の「物」については、従来、「物、事也」という訓詁が施されてきた。この訓詁の意味については、煩瑣になるので、今は論じない。詳細については、木下鉄矢『朱熹哲学の基軸——続 朱熹再読』(研文出版、2009)所収の「格物」をめぐる論考を参照。
- 8 西周の「独知」理解については、前掲「西周と陽明学」(pp.32-36)を参照。「独知」の語は、『大学』『中庸』に見える。西は、英語の「孔腮然斯」^{コンサイイニス}、「conscience」を、「独知」と翻訳している。
- 9 ちなみに、それは、陸九淵が、朱熹の教学を「意見」(臆見)「閑言語」(無意味なおしゃべり)といった言葉を使って、断罪したのと似ている。この点については、拙著『即今自立の哲学』(研文出版、2006)を参照
- 10 漱石は、滞英中の「研究ノート」の中に、「余云フ封建ヲ倒シテ立憲政治トセルハ兵力ヲ倒シテ金力ヲ移植セルニ過ギズ。剣戟ヲ廢シテ資本ヲ以テスルニ過ギズ大名ノ権力ガ資本家ニ移リタルニ過ギズ武士道ガ廢レテ拜金道トナレルニ過ギズ何ノ開化カ之アラン 見ヨカノ紳商杯云フ者ガ漸々跋扈シ来ルコトヲ侯伯子杯ヲ得テ富ヲ求メザル者ハ此紳商ノ下ニ屈服セザルヲ得ザラン否現ニ屈服シツ、アラン カクシテ是等ノ手ニ土地資本ガ集マリテ頭重ク equilibrium ヲ失フニ至ツテ世ハ瓦解シ来ルベシ」と記している(『漱石全集』第21巻、岩波書店、2003、p.56 *下線筆者)。
- 11 夏目漱石『漱石文明論集』岩波文庫、p.26、p.34
- 12 主に先進国において、所得上昇にもかかわらず幸福度が高まらない現象を言う。日本について言えば、内閣府の『平成20年国民生活白書』は、一人あたりのGDPと国民生活の満足度の相関関係の調査を行っているが、それによると1981~2005年に、一人あたりGDPは273万円から424万円に上昇したが、生活の満足度は84年の3.60をピークとして05年には3.07へと下がっている。以上、西川潤「日本人が本当に幸福になるために——生活の豊かさの測り方」勝俣誠/マルク・アラン・ベール編著『脱成長への道』コモンズ、2011、p.149

キーワード：西周、夏目漱石、近代化、儒学批判、人文知